保育の一斉活動場面における大人と幼児のやりとりで見られた笑いについて
―noncompliance 行動に伴う笑いの観点から―

伊藤理絵（白梅学園大学大学院子ども学研究科博士課程）
佐久間路子（白梅学園大学教授）

要約

本研究の目的は、保育の一斉活動場面における大人と幼児のやりとりで見られた笑いのうち、noncompliance 行動に伴う笑いに焦点を当て、保育士等の大人にとって望ましくない場面で幼児が見せる笑いについて考察を試みることである。6 歳児の幼児 20 名（男児 5 名・女児 15 名）を観察した結果、保育士等の大人にとって不適切と見なされる行動（noncompliance 行動）を幼児が笑いながら行った際、大人が幼児の笑いの不適切さそのものに言及したのは 1 エピソードであった。大人からの介入があった際、行動修正する幼児から笑いが消失したり、逆に、笑いながら noncompliance 行動を繰り返したりすることが多かった。幼児の笑いを伴う noncompliance 行動に対し、保育士等の大人は幼児が自ら行動の不適切さに気付くことを促すよう対応していた。また、幼児の笑いを伴う noncompliance 行動の中には、大人から受容してもらいたいという思いと大人の要求を受け入れられない葛藤を自律的に解決しようとしている可能性も示唆された。

キーワード：笑い，幼児，保育，一斉活動場面，noncompliance 行動

1．目的

私たちは、いつも自分の思うままに笑うことはできない。笑いを適切に表出しなければ「今の笑いはおかしい」と見なされ、相手に不快な印象を与えることになるだろう。笑いの適切さ／不適切さの判断は大人でも難しいことではあるが、家族や仲間など様々な関係性にある他者とのやり取りを経験する中で、相手や場に応じて笑いを使い分けるようになることが推測される。

小学 1 年生の学級で見られる笑いを観察した堂本（2002）は、真面目な活動の中で子どもたちが表出する笑いは、自発的な集団ではない学級集団を魅力的な場にするために重要なものであると位置づけた。しかし、教室では決められた活動の遂行が第一目的である以上、学級の秩序は維持されるべきであり、教師には真面目さとふざけのバランスをとることが常に求められていた。

ふざけ行動は、「悪ふざけ」として大人が望ましくない行動と見なしやすい（平井・山田 , 1989）。笑いを伴うふざけ行動を教師等の大人が悪ふざけと見なすとき、そこには子どもへの「こう育ってほしい」といった大人の思いがあり、そのような大人の願いや価値基準に反する子どもの不従順さ（noncompliance）に対して、大人は子どもが場に応じて適切な行動を自ら判断し、選択し、自律的に実行できるよう介入していることが推察される。

自律性とは「自身の意図や目的と、相手の意図や目的の双方に照らして行動を選択し、実行すること」であり、自律性の発達には他者からのコントロールへの抵抗や不従順さ（noncompliance）だけでなく、他者への自発的な従順さ（compliance）の側面も同時に現れる（坂上 , 2010）。自分の笑いを伴う行動が、教師等の大人によって「不適切」と見なされた場合、双方の意図や目的に照らして次の行動を選択することは自律性の一種とも思われる。

幼児教育の場においても、日本では集団の規範に反する行動に対して幼児自らが気付いて行動を修正することを促す教示が行われる傾向がある（結城 , 1998）。幼児期のふざけ行動を縦断的に観察した堀越・無藤（2000）は、幼児のタブー（例：お尻）を用いたふざけに大人が継続的に注意を向けることで、幼児がタブーへの恥ずかしさを強く感じ、次第にタブーに飽きて仲間と楽しく遊ぶ他の方法をとるよう方向付けることを示唆した。幼児が笑いながら慣習的・道徳的に望ましくない行動をとったとき、大人から注意を向けられることによって、幼児が自分の笑いの不適切さに気付くきっかけになる可能性が考えられる。

そこで本研究では、「保育士等の大人により不適切さを指摘された幼児の行動」を、保育士等の大人の思いや価値基準に対する不従順さ（noncompliance）を表す行動として「noncompliance 行動」とし、笑いを

伴う noncompliance 行動が見られたエピソードを分析する。特に規範やルールに規制されやすい一斉活動場面を取り上げ、幼児期の集団生活の場において、大人が不適切と見なす行動とともに見せる幼児の笑いの意味について考察を試みる。

2．方法

2.1　対象児と使用するデータ

6歳0ヶ月～6歳11ヶ月の幼児20名（男児5名・女児15名）を対象とした。笑いを伴うふざけ行動や攻撃的な行動は大人が不適切と指摘する行動の対象になりやすいと考え、笑いと攻撃行動を観察した伊藤他（2009）のデータを使用した。倫理的配慮として、保育所および管轄の担当者に研究の同意を得た後、保育所を通して保護者への説明と協力に応じられない場合は中止可能であることを伝えた。本観察は2005年2月中旬～3月中旬の計5回、観察時間は18.4時間であった。

2.3　観察方法

観察者1名で記録用紙とビデオを用いて記録し、できる限り日常の保育の姿を壊さないよう努めた。時間軸に沿って、笑いや攻撃行動が生じた前後の文脈、周囲の反応、それを受けての行為者のその後の行動を記録した。観察標的児1名を一定時間（約15～20分）観察し、笑いや攻撃行動のエピソード終了（①笑いや攻撃行動を止めた場合 ②仲間同士や教師の介入等により攻撃行動が解決された場合）まで観察を行った。

笑いの表情は、ビデオ記録の約15分について筆者と1名の評定者の2名で判定した。一瞬見せる微笑は一致しにくかったため、口角の上昇に伴って目元が細くなる表情がはっきりと表れた笑いを基本とし、その周辺的な笑いについては前後の文脈と笑い方を記述した。攻撃行動は畠山・山崎（2002）の3タイプ（直接的－道具的攻撃・直接的－脅し攻撃・関係性攻撃）に従い、記述した。

3．結果と考察

3.1　一斉活動場面のエピソードと分類

幼児全員が一つの共通目的に向かって行動することが求められる場面を一斉活動場面（①先生のお話 ②食事時間 ③お片づけ ④紙芝居 ⑤ルールのある活動（例：鬼ごっこ，リズム遊び）⑥活動前準備・整列 ⑦帰りの時間 ⑧修了式の練習）とした。本観察中に得られた245エピソードのうち、一斉活動場面のエピソード数は95で、他は自由遊び場面であった。

一斉活動場面の95エピソードの中で、保育士等の大人との関わりが見られたのは64だった。幼児の笑いを伴う行動に大人も笑い返すなど親和的な笑いを共有するエピソードもあったが、本研究では、保育士等の大人が幼児の笑いそのものの不適切さを指摘したエピソード、および大人が幼児の笑いを伴う行動を不適切であると判断して介入したエピソードで、かつ大人の介入前後の幼児の行動が明確に記録されたエピソードを抽出した。大人が幼児の笑いそのものの不適切さを指摘したエピソード数は1、大人が幼児の笑いを伴う行動を不適切と判断し介入したエピソード数は19であった。

3.2　笑いの不適切さに対する大人の直接的な指摘

一斉活動場面において、保育士等の大人が幼児の表出した笑いに対し「今の笑いはおかしい」と笑いそのものの不適切さを直接指摘したのは1エピソードのみであった（エピソード1）。なお、エピソード中の名前は仮名であり、幼児の笑いを伴う行動には一重下線、幼児の笑いに対する大人の反応には二重下線を記す。

＜エピソード1＞　リズム遊び中、りな（6歳4ヶ月）が頭の上に椅子をのせている。ピアノを弾いているA先生が気付き「りなちゃん、危ないことするのやめて。」と言い、B先生が椅子を取り上げる。それを見てあきと（6歳10ヶ月）がハハハと声を上げて笑う。するとA先生はピアノを止め「今ね、りなちゃんが危ないことした時、笑った人は誰？ それおかしいと思うの。悪いことした時、危ないことした時、りなちゃん！って･･･」と話をする。あきとはうつむく。A先生は話し終えるとピアノを弾き始めるが、あきとはずっとうつむいたままであった。

あきとは、りながA先生から注意され、B先生に椅子を取り上げられたことをおもしろがって笑った。あきとの笑いを不適切と見なしたA先生は、あきとを名指ししたり厳しい口調で問い詰めたりすることなく、今の笑いの不適切さを説明したのだが、あきとからは笑いが消えた。あきとのうつむき続ける姿からは、自分の笑い声の不適切さを指摘されていることに気付き、おもしろがり続ける心的状態ではなくなったことが推測される。

3.3　笑いを伴う幼児の noncompliance 行動に対する大人の介入

3.3.1　笑いを伴う幼児の noncompliance 行動とエピソード数

幼児の笑いを伴う行動に対して、保育士等の大人が不適切と見なして介入した noncompliance 行動のエピソード数は19、そのうち、ルールのある活動の決まりを守らなかったのが8、活動に参加せずにふざけたりおしゃべりをしたりしたのが7、対人関係のルール

（例：約束を守る）を守らなかったのが２、危険な行動（例：物干し台に乗る）が２エピソードだった。

3.3.2　大人の介入方法と幼児の行動修正率

全てのエピソードで見られた保育士等の大人の介入方法の組み合わせと、各介入方法に対して幼児が指摘された noncompliance 行動をやめた、もしくはやめさせられたエピソード（行動修正率）を表１に示す。19 エピソードのうち、エピソード終了時に行動修正が見られたのは 13 エピソード（68.42%）であった。

大人は幼児の笑いを伴う行動を不適切であると判断した際、今すべきことを本人に向かって言葉で直接伝える「直接的な指摘」よりも、行動修正を本人に委ねるような言葉で伝える「婉曲的な指摘」（例：「お話している人がいるなぁ」）を多く用いる傾向にあり、婉曲的な指摘のみを使用したエピソードは 42.10％で最も多かった。婉曲的な指摘で行動修正がなされない場合、直接的な指摘だけでなく、厳しい表情で見続ける等の「非言語による指摘」や、感情が高ぶった幼児をなだめるといった「感情の立て直し」といった他の方法を組み合わせていた。危険性が高い行動や noncompliance 行動が繰り返される場合は、noncompliance 行動をする幼児同士を引き離す等の「強制介入」によってやめさせることもあった。

介入を行う大人の表情に笑いはなく、基本的に淡々と冷静に介入していたが、特に、危険性の高い noncompliance 行動や noncompliance 行動の継続が長引く場合は、厳しい表情や口調で対応していた。

3.3.3　大人の介入後の幼児の行動分類

エピソードの中には、noncompliance 行動を繰り返すなど複数の行動が含まれることがあったため、保育士等の大人の介入後の幼児の行動について、Kochanska & Aksan（1995）および坂上（2010）を参考に、行動を修正した場合と noncompliance 行動を継続した場合に分け、分類した。分類基準を表２～３に示す。行動修正および noncompliance 行動を行った幼児１名につき１事例とし、同じエピソード内で行動修正と noncompliance 行動が繰り返されたり、異なるタイプの行動修正や noncompliance 行動が見られたりした場合は、その行動につき１事例とした。

筆者１名と評定者１名での定義の確認後、分析対象となる 19 エピソードと、3.2 で取り上げた大人が幼児の笑いの不適切さを直接指摘した１エピソード、およびその他の笑いの９エピソードを加えた 29 エピソードについて、行動修正と noncompliance 行動の事例数とタイプを独立に分類した。行動修正は 94.12％、noncompliance 行動は 92.11％一致した。不一致の事例は協議し、決定した。

大人の介入後の幼児の行動修正と noncompliance 行動の事例数および割合を、笑いの有無別に示す（表４）。大人の介入後に見られた幼児の行動は 53 事例、そのうち大人の介入後も幼児に笑いが見られたのは 20 事例、笑いが消失したのは 33 事例だった。つまり、大人の介入後に見られた全事例のうち 62.26％は笑いが消失する事例であった。

大人の介入後も幼児に笑いが見られた 20 事例のうち、18 事例（90.00％）で noncompliance 行動が繰り返されていた。そのうちの 11 事例（55.00％）がふざけ的 noncompliance 行動であった。一方、笑いが消失した 33 事例のうちの 20 事例（60.60％）は、行動修正を行う事例であった。

3.3.4　笑いを伴う noncompliance 行動のエピソード

大人にとっては不適切と見なされる noncompliance 行動であっても、そこでの幼児の笑いを伴う行動は、幼児にとっては大人への働きかけであり、大人からの受容を求めていることがあった（エピソード２）。なお、以下のエピソードでは、笑いを伴う noncompliance 行動には一重下線、笑いが伴わない行動修正には二重下

表１：大人の介入方法の組み合わせと幼児が行動修正率

大人の介入方法の組み合わせ	エピソード数（%）	行動修正率（%）
婉曲的な指摘のみ	8 (42.10%)	6 (75.00%)
直接的な指摘のみ	1 (5.26%)	1 (100.00%)
非言語的よる指摘のみ	1 (5.26%)	1 (100.00%)
婉曲的な指摘＋直接的な指摘	2 (10.52%)	1 (50.00%)
婉曲的な指摘＋非言語による指摘	1 (5.26%)	0 (0.00%)
婉曲的な指摘＋直接的な指摘＋強制介入＋感情の立て直し	1 (5.26%)	0 (0.00%)
婉曲的な指摘＋非言語による指摘＋直接的な指摘＋強制介入	1 (5.26%)	1 (100.00%)
直接的な指摘＋強制介入	2 (10.52%)	2 (100.00%)
直接的な指摘＋非言語による指摘	1 (5.26%)	0 (0.00%)
直接的な指摘＋感情の立て直し	1 (5.26%)	1 (100.00%)
エピソード計	19 (100.00%)	13 (68.42%)

表２：行動修正のタイプ

行動修正	定義
①自律的行動修正	自分と同じようなnoncompliance行動を行っている他児に対して大人が示した指示や要請、価値基準を受容し、直接介入はされていなくとも自ら行動修正を進んで行う。
②受容的行動修正	大人の指示や要請、価値基準を受容し、従う。子どもが納得して従っているようにも見える。大人と駆引きした結果、大人の要求に納得して行動修正することもある。
③非自律的行動修正	大人の指示や要請、価値基準に最終的に従うものの、遵守が不十分だったり、一時的な遵守拒否が見られるときもある。継続的な介入がないと従うのをやめたり、強制的な介入を受けることによって行動修正が行われたりする。渋々従っているように見えたり、注意されたことによる落胆から行動をやめるときもある。

線、笑いが伴わない noncompliance 行動の継続には太線を記す。

＜エピソード２＞　お片づけの時間、まい（６歳２ヶ月）は片付けをしているＣ先生のお尻を触ると、りかこ（６歳２ヶ月）の所へ走っていく。そして２人でにこにこ笑いながらＣ先生に近づき、Ｃ先生のお尻を触る。Ｃ先生が振り向くと、２人は片付けが終わっていないテーブルの所へ笑顔で逃げていく。Ｃ先生がそのテーブルを片付けにやってくると、それを見て２人はそばにある椅子を片付け始める。

まいは片付けをせずＣ先生のお尻を触り、そのふざけにりかこを誘う。幼児にとって、お尻等のタブーを用いたふざけ行動は仲間関係を形成したり強化したりする手段になる場合がある（堀越 , 2003; 堀越・無藤 , 2000）。２人が笑いながらＣ先生に近づいてお尻を触り、Ｃ先生が振り返るとにこにこ笑って逃げる様子からは、タブーを用いたふざけ行動を笑いながら行うことで、２人がＣ先生に働きかけ、一緒に楽しむことを求めているように見える。しかし、Ｃ先生は黙って片付け続けることで、片付けの時間にもかかわらず片付けをせずに笑ってふざける２人の行動の不適切さを伝えている。

Ｃ先生の姿を見て２人は片付け始めるが、その時の２人の表情から笑いが消失していることから、自分たちの笑いを伴う noncompliance 行動が今の状況では不適切であったことの気付きが表れていることが推察される。

また、保育士との約束をあえて守らず、noncompliance 行動を笑いながらすることで保育士に注目してもらおうとする幼児からの働きかけも見られた（エピソード３）。

＜エピソード３＞　Ｂ先生は、泣いている女児の話を聞いている。りな（６歳４ヶ月）は、カバン掛けを倒すと笑ってＢ先生を見る。Ｂ先生に「お約束守るんじゃなかったのー？」と言われ、「おしぼり一人で絞れない。」と言う。Ｂ先生が「絞れるでしょー」と言うと、カバン掛けをガタガタ揺らす。Ｂ先生に「りなちゃん、まず座ってー」と言われ、自分が座る椅子を取りに行く。

りなのカバン掛けを倒すという行動は、Ｂ先生との約束を破る行動である。カバン掛けを倒した後にりなが笑う姿は、Ｂ先生との約束をあえて破ることで、泣いている女児に対応しているＢ先生の注意を自分に引き付けようとしているように見える。「おしぼり一人で絞れない」という言葉からも、りなの noncompliance 行動に込められた「先生と一緒に絞りたい」という思いが読み取れる。

坂上（2002）は、幼児が危険な行動を取ったり、社会的慣習および道徳的観点から見て望ましくないとされる行動を取ったりしたときに養育者から非難や叱責を受けた場面を葛藤的やりとりとして抽出し、養育者側も子どもの変化に応じて自身の関わりを変えていくことを示唆した。保育の場面では、家庭での養育者にあたる大人は保育者であると考えられる。Ｂ先生は、一緒におしぼりを絞ろうと交渉するりなの要求に対し、一人で絞るよう促すものの、りながさらにカバン掛けを音を立てて揺らして訴えると、りなが受け入れやすい「まず座って」という直接的な要求に関わりを変えている。

積極的な noncompliance 行動に伴う笑いは、幼児の中に「やってはいけない」という内面化された行動基準がありながらも、笑いの親和関係を樹立する機能を前面に押し立てて実際には行動するという複雑な戦略を取る中で見られる笑いである（友定 , 1993）と思われる。りなが最初に見せた noncompliance 行動に伴う笑いは、Ｂ先生とやり取りするきっかけを作るための親和的笑いであったことが推察される。

表３：noncompliance 行動のタイプ

noncompliance行動	定義
①積極的noncompliance行動	大人が示す指示や要請、価値基準を理解していながらも完全には受容せず、noncompliance行動を行う。大人に対しnoncompliance行動の受容を求めて自ら進んで不適切行動を行っているように見えるときもある。時に継続したり、繰り返したりする。
②ふざけ的noncompliance行動	大人が示す指示や要請、価値基準を受容せず、むしろ大人に対してnoncompliance行動の共有を求めて継続したり、繰り返したりする。ただし、自分の行動が大人にとってnoncompliance行動と見なされ、行動修正すべき対象となる行動であることを理解していないように見える。
③非顕在的noncompliance行動	大人の指示や要請、価値基準に従わず、介入を嫌がったり、逃避したり、無視したりする。ただし、あからさまに拒否的態度を示すわけではない。
④拒否的noncompliance行動	大人の指示や要請、価値基準に従わず、促されると、あからさまに拒否・逃避・駆引きをしたりする。
⑤反抗的noncompliance行動	大人の指示や要請、価値基準に従わず、反抗的な態度を示す。自己制御が不十分な手段（例：怒る，泣く，蹴る，癇癪を起こす）で拒絶する。

表４：大人の介入後の修正行動および noncompliance 行動の事例数および割合

大人の介入後	笑いを伴うnoncompliance行動後 笑い有 20（37.73%）	笑い無 33（62.26%）
＜行動修正＞		
①自律的行動修正	0(0.00%)	3(9.09%)
②受容的行動修正	1(5.00%)	10(30.30%)
③非自律的行動修正	1(5.00%)	7(21.21%)
計	2(10.00%)	20(60.60%)
＜noncompliance行動の継続＞		
①積極的noncompliance行動	6(30.00%)	3(9.09%)
②ふざけ的noncompliance行動	11(55.00%)	1(3.03%)
③非顕在的noncompliance行動	0(0.00%)	2(6.06%)
④拒否的noncompliance行動	1(5.00%)	5(15.15%)
⑤反抗的noncompliance行動	0(0.00%)	2(6.06%)
計	18(90.00%)	13(39.39%)

一方、大人に受容されないことが分かると、反抗的な noncompliance 行動へ発展することもあった（エピソード４）。

＜エピソード４＞　ちさ（６歳８ヶ月）は修了式の練習をせず、注意されてもケラケラ声を上げて笑ったり、にこにこ笑いながら「サンバー！」と踊ったり、遊戯室を走り回ったりしている。ちさに対し、C 先生は厳しい表情で注意し続ける。注意されても笑っていたちさだったが、だんだん顔を真っ赤にし、「あー！！」と叫ぶと、C 先生を見ながら遊戯室を出て行こうとする。C 先生が厳しい表情のまま、ちさを見続けていると、ちさは廊下に置いてある布団入れの中に入っていく。

クラスの子たちが修了式の練習をしている中で、ちさだけが遊戯室を走り回る等の行動をし、C 先生は厳しい表情で対応し続ける。ちさは、どんなに笑いかけても自分の行動を受け入れてくれない C 先生へ怒りを表し、C 先生の様子を窺いながら noncompliance 行動を継続するが、C 先生は動じない。

先述したように、幼児は笑いながら noncompliance 行動をすることで保育士等の大人からの受容を求めるときがあるが、その笑いや行動を大人が許容するか否かは活動の内容や目的に応じて変化すると思われる。エピソード３の B 先生は、りなが納得するように関わりを変え、行動修正を促していた。しかし、社会的慣習や道徳的観点および安全面から見て望ましくない行動の中には、基準を下げずに行動修正を促す必要性が高まる場合もあると思われる。

保育士等の大人は状況に応じて守るべき行動の基準を変えており、幼児はそのようなやり取りを日々経験しながら、集団生活を楽しく過ごすための規範やルールとともに笑いの適切さ／不適切さをも内面化していくことが推測される。その一方で、幼児はあえて笑いを伴う noncompliance 行動を行うことで、受け入れてほしい自分の思いと、それを受け入れられない大人からの要求との葛藤を自律的に解決しようとしているようにも思われる。

４．今後の課題

本研究では、笑いを伴う幼児の行動を保育士等の大人が「不適切」と判断し介入した事例を取り上げ、幼児の集団生活における noncompliance 行動に伴う笑いについて検討した。大人が幼児の笑いそのものの不適切さを直接伝えたのは、１エピソードのみであった。本研究は、一つの保育所を対象とした結果であるため解釈には慎重を要するものの、笑いを伴う行動を不適切であると判断した大人は、笑いの不適切さではなく、笑いが付随する行動の不適切さに焦点を当て、婉曲的に指摘する可能性が考えられる。

また本研究では、幼児の笑いを伴う行動を分析したが、幼児は自ら笑う経験だけでなく、当然ながら自分の行動を周りから笑われる経験もしている。保育の現場では、他者から笑われる行動は恥ずかしいという意識を幼児にもたせるような働きかけによって、幼児に集団規範からのズレを理解させる場合がある（友定，1993）。笑いの適切さ／不適切さ（笑いの適切性）に関する規範の内面化過程を実証することは、集団生活の中で規範意識が幼児期にいかに培われていくのかを理解する一つの視座にもなるのではないだろうか。

本研究で得られた知見を基礎に、幼児が笑いの適切性をいかに理解し、内面化していくのか、大人と子どもとのやり取りだけでなく、子どもを取り囲む環境全体を含めて横断的および縦断的に明らかにすることが今後の課題である。

謝辞

ご協力くださいました皆様に感謝いたします。本研究の一部は、日本発達心理学会第 25 回大会で発表しました。ご助言くださった方々に感謝します。

〈引用文献〉

畠山美穂・山崎晃（2002）．自由遊び場面における幼児の攻撃行動の観察研究：攻撃のタイプと性・仲間グループ内地位との関連 発達心理学研究 13, 3, 252 － 260.

伊藤理絵・内藤俊史・本多薫（2009）．幼児に見られる攻撃的笑いについて－観察記録からの検討－ 笑い学研究 16, 114-118.

堂本真実子（2002）．学級集団の笑いに関する民族誌的研究 風間書房.

平井信義・山田まり子（1989）．子どものユーモア：おどけ・ふざけの心理 創元社 .

堀越紀香（2003）．ふざけ行動にみるちょっと気になる幼児の園生活への対処 保育学研究 41, 1, 71-79.

堀越紀香・無藤隆（2000）．幼児にとってのふざけ行動の意味－タブーのふざけの変化－ 子ども社会研究 6, 43-55.

Kochanska, G., & Aksan, N.（1995）. Mother-Child Mutually Positive Affect, the Quality of Child Compliance to Requests and Prohibitions, and Maternal Control as Correlates of Early Internalization. Child Development 66, 1, 236-254.

坂上裕子（2002）．歩行開始期における母子の葛藤的やりとりの発達的変化：一母子における共変化過程の検討　発達心理学研究 13（3), 261-273.

坂上裕子（2010）．歩行開始期における自律性と情動の発達－怒りならびに罪悪感，恥を中心に－ 心理学評論 53（1), 38-55.

友定啓子（1993）．幼児の笑いと発達 勁草書房 .

結城恵（1998）．幼稚園で子どもはどう育つか－集団教育のエスノグラフィ 有信堂高文社 .